

企画・編集：片岡正子，本田茉也 京都大学医学部附属病院 先制医療・生活習慣病研究センター 放射線診断部門

序 説

今回の臨床画像3月号のコンセプトは、「苦手分野を克服しよう」で、その一分野として乳房画像を選んでいただいた。確かに、多くの一般放射線科医にとっては、あまり馴染みのない領域である。マンモグラフィがわが国においては(国際的にはかなり特殊だが)乳腺外科のほか非放射線科医が検診などの読影に大きくかかわってきたこともあるだろう。また、X線読影とはいえ、マンモグラフィの読影はそれに特化した学びが必要である。超音波も乳腺外科の先生が主体で行っていただければわれわれには馴染みがなくなる。

ただ、昨今乳房MRIを用いる機会が増加してきた。MRIは放射線診断部門で扱われ、画像診断医的な考え方が必要である。頭の上から足の先までなんでも読影することになっている放射線診断医としては、以前は読影していなかった乳房MRIに手をつける機会も出てくるかと思われる。

そこで今回の特集は、放射線診断医にとって必要性の高い乳房MRIを中心に組み立てた。乳房MRIはBI-RADS®に沿って読影しレポートを作成する。「とりあえずレポートが書ける」を目標として、mass・NMEの読影法につき、瀬川景子先生、塚田実郎先生に執筆いただいた。実際の症例を交えながら系統だった解説をいただいているのでまずはここから読んでほしい。昨年末に改訂となった新しいBI-RADS® v2025についての情報も盛り込んでいただいた。さらに、困ったときの解決策として、太田理恵先生、金尾昌太郎先生には、実際に現場で出会いそうな教育的な4症例を、研修医と指導医の対話形式で提示していただいた。症例検討会を聞くような感じで気軽に読み進めていくだけで、日常臨床で特に初心者が出会いそうな問題に対処する、ちょっとアドバンスなコツが身に付くようになっている。

診断周りの技術の進歩についても必要な知識を手軽に身に付けられるようにまとめた。乳房トモシンセシスについては、原田レオポルド大世先生らによる読影ポイントを、豊富な症例画像と合わせてチェックしてほしい。断層画像としてDBTは一部CT/MRI的な要素もあり、マンモグラフィよりも放射線診断医にとって親しみやすいかもしれない。

最近の乳癌治療については、乳腺外科の立場から前島佑里奈先生に種々の新規薬剤を用いた周術期治療や再建までをコンパクトに4ページにまとめていただいた。今後広がる可能性のある低侵襲治療のRFAは、適応症例決定からフォローまでMRIを中心とする画像評価が欠かせないが、筆者ら自身も含め経験値が少ないため、治験の段階から長くRFA画像評価にかかわってこられた菊池真理先生に執筆をいただいた。教科書にもあまり載っていない分野であり、診断の際には手元に置いておきたい。また放射線治療の進歩も著しく、平田希美子先生には、寡分割照射などの新技術に加え、オリゴ転移に関する考え方など診断にも影響しうるトピックをコンパクトにまとめていただいた。

最後に、まさに今の話題である乳房画像におけるAIの活用についての章を加えた。乳癌検診については世界のエビデンスで検診のあり方が大きく変わる可能性がある。他方、画像診断支援AI(AI-CAD)を使う立場では知識をもつての安全運用が望まれる。AI-CADについては放射線診断科が主導して活用しているところも多いが、そうした人にとっても検診を含む乳房画像分野の動向は重要と思われ、知っておいてほしい知識をまとめた。

このように、短い文面のなかに重要エッセンスを絞り込んだ特集となっている。苦手克服のみならず、エキスパートの先生にもぜひ手元に置いていただき、日常診療に役立てていただければ幸いである。

片岡正子，本田茉也